

かごしまの昔話

「ふるやの古家の漏り」



昔、親子四人が暮らしておりました。ところが、父母が死んでしまい、姉弟二人の子どもが残されました。二人はまだ独り立ちできる年齢ではなかったので、近所の家の手伝いをしながら暮らすことになりました。夜は親の残してくれた家で夜なべ仕事をしました。家はたいそう古いもので雨漏りがしますが、馬屋がついていて、そこに一頭の馬を飼っていました。これは親の残した唯一の財産でした。

ある真つ暗な晩のこと、この馬を食ってやろうと虎が馬屋に忍び込みました。それからまた、博勞（牛馬を売買する人）がこの馬を盗もうと入るすきをねらっていました。子どもたちは何も気づかないで、縄をなったり、草履を作ったりしながら話をしていました。



「姉さん、この世で一番怖いものは何だね」

「私は夜訪ねてくる人が怖いよ」

「ふーん、そうか。俺は古家の漏りが一番怖いな。今晚あたり、来るんじゃないかね」

「そうだね。人間よりも虎や狼よりも古家の漏りが怖いね。うちは古いから本当に怖い」

「姉さん、雨だ。さあ、漏りが来るよ」

これを聞いた虎は「ふるやのもり」という恐ろしいものにつかまったら大変と馬屋をどびだしました。すると、博勞が馬と間違えてその背中にとび乗ったのです。虎は「ふるやのもり」と思っ、走りに走りました。そして、ようやく背中に乗っているものを大木の根元に振り落として、山奥へ帰り着くことができました。

翌朝、猿がやってきたので、虎は昨夜のことを話しました。猿は「ふるやのもり」をやっつけると言い、虎に案内させました。大木に行ってみると、下の方に洞穴があったので、猿がしっぽをいれて探りました。すると、隠れていた博勞がそれを引っ張り、しっぽは切れてしまいました。これを見た虎はまた走り出し、海を渡って唐の国に逃げていきました。猿も続きましたが、しっぽの切れたところが痛くて日本に残りました。それで今、日本には猿はたくさん棲んでいるけれど、虎はいないのだそうです。

（原話 知名町 山田島秀）
文／有馬英子 絵／二石綱夫